

五月に二度、桂田芳枝（一九二〇年）の旧蔵資料をご寄贈いただくため、余市町の桂田家へ行ってきました。現在は、芳枝の長兄のお孫さんが管理されています。寄贈いただいた資料は、研究ノート、書簡、証書類、写真、愛用のカメラ、海外出張用の鞆などです。

### 女性初の数学分野の理学博士

桂田芳枝は、現在の余市町の裕福な家庭に生まれ育ち、一九二八年小樽高等女学校（現小樽桜陽高校）を卒業、東京物理学校（現東京理科大学）、東京女子大学数学専攻部で数学を学びます。この間、一時期、雇（現在の非常勤職員）として北大理学部数学科に勤務し雑用を



こなしました。このときに数学の講義を聴講する機会を得、大

学に学ぶ女性の姿を見て、北大入学の夢を持つようになったそうです。

戦前の日本では女性が大学に入学することを制度上想定していませんでした。それでも大学進学を望む女性たちが、制度の枠を崩しながら、大学の門をくぐり抜けます。一九二三年に初めて三名の女性が東北帝国大学に入学しました。北大初の女性の入学は一九二八年です。桂田芳枝は一九四〇年に北海道帝国大学理学部数学科に入学しますが、北大に入学した十一名目の女性に当たります。入学後、桂田は河口商次教授に師事し幾何学を専攻して、一九四二年に卒業して助手となります。一九五〇年

七月には「高次空間の非ホロノミック系における展テンソルの作用について」により、数学分野で女性初となる理学博士号を取得します。十一月には北大初の女性の助教となりま

### 数学者の研究生生活

一九五六年には、位相幾何学の大家、スイス連邦工科大学のハインツ・ホップ教授（二八九四〜一九七二年）に招かれ、共同研究を行います。研究以外の著述の少ない桂田ですが、ホップ教授との共同研究についてはいくつか回想を残しています。

ホップ教授から与えられた課題に取り組み、教授の家で議論した際、白熱して声高になったことがありました。心配したホップ夫人が「どうしたのですか、お二人とも互いにノ、



H・ホップ教授（1962年）

ノーとばかりおっしゃって」と部屋に入ってきて、三人で笑い合ったそうです。

教授から出題された拡張定理を得ることができて、桂田が説明し、教授と質疑を行なった後、ホップ教授は後手に窓の外を眺め、室内が暗くなるのも気づかない様子で十分程考え込んでから、こここしながら「very interesting, very interesting」と言います。桂田はその日の夕食後、喜びにじっとしていられず、チューリッヒの夜の街を駆け回ったそうです。

その後一九七〇年まで三度にわたってホップ教授の招待を受けて研究を共にしています。

### 北大初の女性の教授

この間、桂田は一九六七年十月には理学部数学科の教授に就任しました。旧帝国大学では、前年に九州大学教養部教授に就任した城野節子に次ぐ二人目の女性教授の誕生です。学部の講座担任教授としては最初です。

当時の新聞は、「私たちの仕事は、眠っているとき以外はいつも続いています」「思考がいちばん整理されるのは床の中」だから、昼間でも自宅にいるときは、床の中で考えることが多い。あるイメージが浮かぶと、飛び起きて数式で立証にかか



桂田芳枝の研究ノートと教授室の表札

る。この「創造する瞬間が、最大の喜びだという。だが、その喜びはつぎの新しい問題に向けて瞬時に消えてしまう。そんなことの繰り返しで、世間のことにはほとんど没交渉に生きてきた」と伝えていきます。

桂田芳枝は、「女性初」という修飾語とセットで取り上げられます。この文中でも何度も繰り返しました。男女格差が大きく、権威主義が幅を利かせがちな大学において、桂田はエホッフメイキングな存在です。けれども、桂田の回想、旧蔵資料を見渡したとき、それ以上に、「数学者としての姿が強く印象に残ります。余計な飾り言葉は必要ないのかも知れません。桂田芳枝の旧蔵資料は、今後、展示等で紹介していきたいと思